

## 音楽科教育における「創造性」に関する一考察

### ～小学校音楽科における在り方を問い直す～

教育学研究科 芸術教育専攻 音楽科教育学領域 大西華恵

現在、教育において「創造性」の育成が求められている。平成 29 年 3 月に公表された新小学校学習指導要領の総則によると、「創造性の涵養を目指した教育の充実」に努めるべきとされている。だが、この「創造性」というものの概念は、はっきりと定まっていない。教育において創造性を育成することを目指すならば、創造性が何か、どのようにすれば身につくのかを把握することが必要だろう。そこで、本研究の目的は「創造性」の概念規定を行うこと、また、小学校音楽科において育成される「創造性」がどのようなものか、どのようにしたら身に付くのかを考察することである。創造性の育成は、芸術系教科において大きく期待されているため、音楽科における創造性を育成するための方法を検討することは有意義なことである。

筆者は、音楽科における創造性は、『思考と試行の繰り返し』であるとした。「思考」したことを「試行」することで形にし、実践結果として残し、それを次の思考につなげていくのである。目に見える結果が出ていなくても、子どもが過程を踏んでいけば良い。その過程が「創造」であり、その過程を構成するのは、思考と試行である。このような活動であった時、創造的な活動だということができる。何かが出来ていても、そこに思考と過程がなければ無意味である。思い付きでやっても、それが見た目的には良いものでも評価できない。

したがって音楽は、「考える教科」、「考える力を養う教科」ということができるだろう。教育活動全体において、音楽で培う「思考」と「試行」の力は必要になってくる。様々な教科で様々な知識や情報を得ることで、子どもたちの中で蓄積されるものがある。それを、音楽科で培う思考と試行によって、それらを「料理」するのである。音楽を学ぶことというのは、音を言葉に置き換えて学ぶことでもあるから、そのためには思考は不可欠である。そして、作曲者の意味を理解するためにも、なぜそうなのかを考えること、実際に演奏してみることは必要不可欠である。意味を押し付け、そのように感じるべきだと教えても、その音楽の理解にはならない。理解の過程を経ながら、「なぜこういう意味なのか分かった」という段階に至ってこそ、その作曲者の意図を理解し尊重することができる。表現領域においては、「考えること、実際にやってみることを効果的に繰り返す実践」が必要で、鑑賞領域においては、「ただ聴くだけではなく、『能動的』に聴くこと」が必要だと考える。

創造性とは、限られた場面、限られた人にだけ発揮できるものではない。特別なもの、何か真新しいことを子どもたちができるようになること・させることが「創造的な教育」ではない。創造性は「過程」において育まれるものであり、「過程」を作っていく力こそが創造性なのである。

今後は、ここで考察したことを実際の音楽の授業で実践していくことが求められるだろう。

う。指導案の考案等を通して、実際の授業に還元する方法を考えていきたい。